

早稲田大学大学院日本語教育研究科

博 士 論 文 概 要

論 文 題 目

日本語教育における接触場面の規範研究
-管理プロセスと規範の動態性に関する考察-

申 請 者

加 藤 好 崇

2007 年 9 月

第 1 章 本研究の概要

日本語母語話者（NS）と日本語非母語話者（NNS）から構成される接触場面の増加が、今後、一層予測される中で、接触場面に対する日本語教育としての姿勢や捉え方が明確にされる必要性もまた増している。

接触場面に対する捉え方の一つとして、接触場面を内的場面へ向かう中間的場面として位置付け、NS のみが含まれる内的場面規範を教育していくことによって、NNS を NS に近づけ、NNS が問題にできるだけ遭遇しないように事前調整を行うべきだとする考え方があるだろう。別の捉え方としては、接触場面の言語的・文化的少数派、つまり NNS 側の持つ言語や文化的背景を同等のものと見なし、一様に認めていこうとする多元主義的な考え方もある。

しかし、現実の接触場面は、前者の捉え方のように、内的場面の日本語母語規範のみで管理されているわけでもないし、また、後者の捉え方のように、どのような規範でも容認される管理方法がとられているわけでもない。

本研究は日本語接触場面が、実際にどのような規範に基づいて参加者たちによって管理されているのか、また、規範はどのような動態性を持っているのか、さらにそういった接触場面の実態に対して、日本語教育はどのように関わっていく必要があるのかについて考察を行うものである。

考察にあたっては、言語管理理論（Jernudd & Neustupný1987）の中心的な概念の一つである管理プロセスを利用する。これは基本的にコミュニケーション場面における問題とその調整に関わる概念であるが、単に調整方法といったプロダクトのみを重視するものではなく、調整にまで至らなかった段階のプロセス自体もコミュニケーションの重要な要素として捉えていこうとするものである。また、管理プロセスの出発点には、行動規定である規範の存在が想定されており、評価の調整行動の痕跡から帰納的に分析していくことによって、その場面で顕在化していた規範を明確化することが可能となる。

第 2 章 先行研究

本研究に関連する研究は、初対面場面に関わる研究と、言語管理理論を基礎として行われた規範研究の 2 つに分類できる。

前者の初対面場面研究は、内的場면을対象とした研究と接触場면을対象とした研究に分けられる。どちらの分野においてもポライトネス理論（1987）を支柱として、社会言語的

側面について分析を行ったものが多い。研究方法については、会話データの質的な研究に加え、フォローアップ・インタビューを同時に採用するものが散見される。しかし、このインタビューの手法は本研究とは多少異なるものとなっている。また、接触場面を題材とした初対面場面研究では、内的場面との相違点が多く指摘されている。

2 つ目の言語管理理論における接触場面規範研究については、研究者によって規範、あるいは期待の捉え方に微妙な差が存在することが指摘できる。しかし、基本的にどの研究においても、規範を言語面に限っていないこと、規範には日本語母語規範以外のバリエーションが適用されていること、規範を直接日本語教育のシラバス項目として取り扱っていないことなどが共通点として挙げられよう。

第 3 章 本研究の枠組み

接触場面における規範は 3 つの方法で分類が可能である。

まず、当該接触場面の方向性・目標から「コミュニケーションを成立させなければならない」と「良好な対人関係を形成・維持しなければならない」という上位規範が設定できる。次に、インターアクション能力の観点から「言語的規範」「社会言語的規範」「社会文化的規範」の 3 分類が設定できる。最後に、「日本語母語（自国の母語）規範」「相手（目標）言語規範」「共有規範」「第三言語規範」「個人規範」、そして新規範を含む「接触場面規範」といった選択可能領域からの分類が可能である。最初の 2 分類と異なり、最後の分類には接触場面に特徴的な規範を分類する「接触場面」の項目が設定されている。

上記の規範分類はすべて考察対象とされ、その上で議論が進められるが、4, 5, 6 章では特にインターアクション能力からの分類方法を基盤にして分析を行う。考察の際には、共通の物差しとして言語管理理論における管理プロセス（図 1）を利用する。それぞれの能力に関係する規範には質的な差が存在するが、逸脱から調整行動に至るプロセス自体は共通するためである。

また、本研究で主に対象としている規範は、コミュニケーション成立と対人関係の良好な成立を目指す上位規範に沿って、参加者により実際に適用されている行動規定を指しており、同時に共起可能性を持ち、統制的、蓋然的で評価や情動などを伴うものである。したがって、辞書的な文法や音声の規則に焦点を置いているわけではない。

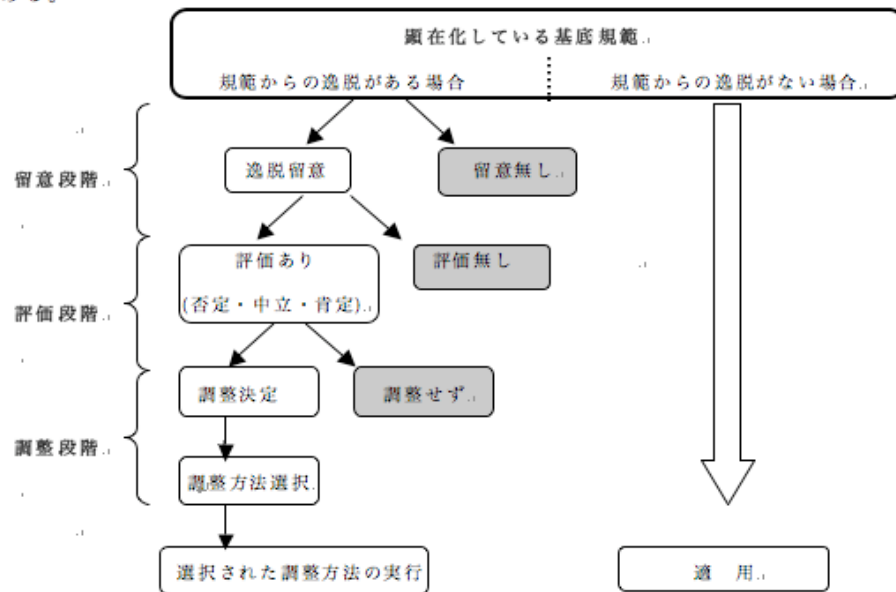


図1 基底規範からの逸脱の有無，及び逸脱した場合に生起する管理プロセス

また，規範の動態性分析については加藤（2006）の研究を基礎にする。加藤は規範の動態性について次のような3分類を行っている。まず，動態性タイプ1は「規範の適用のされ方」に動態性が見られるタイプ，動態性タイプ2は基底規範を構成する「規範自体が交替」するタイプ，動態性タイプ3は基底規範の中に接触場面用の「新規範」が生成されるという意味の動態性である。本研究では基底規範内の変容という観点から動態性タイプ2とタイプ3を一つにまとめて分析を行う。

また，規範を分析する際の重要な概念である「期待」についても明確にしておく必要がある。「期待」とは，情報量が十分ではない状態の下に構築される，会話相手に対する行動の予測や相手国の動向の予測などに関する知識構造を指している。これまでの規範研究では期待と規範の分類が明確ではなく，混在して出されているため，本研究ではできるだけ明確に分けて議論をしていく。

第4章 研究方法

本研究は，関東圏の某私立大学に在籍する日本人学生（学部生・大学院生）と，同じ大学に在籍する留学生（学部留学生・大学院生・日本語研修課程生）の，初対面から三回目までの接触場面会話（20分間）39例（初対面接触場面13例・第二回接触場面13例・第三回接触場面13例）の分析を行ったものである。会話が文字化された後，すべての参加者に対して録画ビデオを再生刺激としたフォローアップ・インタビュー（各1時間，合計

78 時間) が実施された。

本研究ではフォローアップ・インタビューが重要な意味を持つ。なぜなら図 1 の管理プロセスを分析する場合、談話上に現れない被調査者の意識もまたプロセスの一部を構成しているためである。したがって、フォローアップ・インタビューの手続きと、質問形式、被調査者の回答の分類などをできるだけ詳細に設定をした。

インタビューの質問は自由に話してもらう「オープンエンドな質問」と「構造的な質問」を含む半構造化形式となっている。後者の「構造的な質問」には、「構造質問」（オープンエンドな質問の中で、被調査者に語られなかった調整行動について聞くもの）と、「留意・評価質問」（調整段階以前の留意段階や評価段階についての意識を聞く質問）、また「比較質問」（接触場面と内的場面对比させる質問）、「記述的質問」（会話後に相手と会ったか、日本に来た理由や学習歴、外国人の友人はいるか、会話前の準備、等などの質問）がある。被調査者はインタビュー時、接触場面規範に「浸った」状態で自分の言語行動を語るため、接触場面規範であるということが意識化されないことが多い。「比較質問」は内的場面对比をさせることで、被調査者に接触場面規範の使用を意識化させる手段である。

また、被調査者の回答パターンには次のようなものがある。「会話時の調整行動やプロセスの意識を覚えていて自発的に語る」「会話時の調整行動やプロセスの意識を、ビデオが刺激になって思い出して自発的に語る」「会話時の調整行動やプロセスの意識を、研究者の焦点化が加わることによって語る」「会話時の全体的な印象をマクロ的に覚えていて語る」「内的場面一般についての自分の言語行動を思い出して語る」「接触場面一般についての自分の言語行動を思い出して語る」の6タイプである。これらは、それぞれ信頼性を考慮してデータとされた。

第 5 章 社会文化的規範と管理プロセス

本研究では、言語的規範、社会言語的規範、社会文化的規範のうち、まず社会文化的規範を最初の分析対象としている。言語が文化を基礎とし、分離不可分であるならば、基礎となる社会文化的規範を先に分析する必要があると考えるためである。

社会文化的規範は、日本語接触場面であっても、NS、NNS 側双方の規範が顕在化し適用されていた。また、社会文化的規範には、必ずしも逸脱という用語が適切ではない場合もある。したがって、管理プロセスの図 1 に若干修正を加え、管理プロセスの留意段階を、

「逸脱の留意」と「相違・類似の留意」の2つに分類し分析を行った。

前者は規範からの逸脱として調整対象となりえるが、後者は相手の社会文化的規範をバリエーションの一つとして認めた上で、否定的・肯定的・中立的評価をするものであり、基本的に調整対象にはならない。

前者の「逸脱の留意」からは、「ホスト国の文化を知らなければならない」「ゲスト国の文化を知らなければならない」「社会文化的規範を一般化してはいけない」といった規範の顕在化が読み取れた。

また、「相違・類似の留意」に関しては、自国と相手の社会文化的規範の比較から、「類似による肯定的評価」「相違による否定的評価」「相違による肯定的評価」といった評価パターンの他、単に相違に驚くといった中立的評価も数多く見られた。

参加者は相手国や相手国民に対する期待を数多く形成しており、接触場面は知識としての社会文化的規範を意識的、無意識的に伝達しあう中で、自分の期待や知識を管理プロセスを通して、新たに再構築していく場面であると言える。しかし、対人関係の配慮などから調整にまで至らないことも多く、その場合には規範の再構築は起こらない。

第6章 社会言語的規範と管理プロセス

社会言語的規範は主に対人関係を良好に形成・維持させようとする対人関係規範と密接に関係していた。本研究では、この対人関係規範の解釈のために「距離」(ネウストプニー1974)の概念を使用した。分析の結果、研究対象となった接触場面には「連帯的距離を保持せよ」「連帯的距離を縮小せよ」「地位的距離を保持せよ」「尊重を示せ」の4つの対人関係に関わる下位規範が顕在化していたことが分かった。

また、本章では社会言語的規範のうち、特に内容規範についての分析を行い、接触場面では話題が見つからないと感じるマクロ的留意と、個別の内容規範の逸脱から始まるミクロ的留意の2種類の留意パターンがあることが確認された。

マクロ的留意から始まる話題探しの調整行動の際には、主に連帯的距離縮小規範が顕在化し、その下位規範である「プライベートな話題を早期に出せ」「お互いの相違点に興味を示せ」「お互いの共通点を強調せよ」といった3つのストラテジーに沿って話題選択が行われていた。

ミクロ的留意は、先に挙げた4つの対人関係規範に関わっており、各規範間における適用の強さや移行のタイミングに参加者間で差異が存在するような場合などに発生してい

る。例えば、プライベートな話題の提出時期の差，カテゴリー化の違いが導く話題選択の差，などがミクロ的留意を導いていた。また，ミクロ的留意を導くもう一つの原因は，内容それ自体が問題と感じられる場合であり，政治的・金銭的话题などは逸脱として留意されやすい。

第 7 章 言語的規範と管理プロセス

言語的規範では、何となく外国人的な日本語であるというマクロ的留意と、個々の言語的逸脱から始まるミクロ的留意の2つ留意パターンが確認されている。本章ではミクロ的留意からの管理プロセスを扱った。

コミュニケーション成立規範の下位規範として、「NS として会話管理をせよ」「NNS として会話管理をせよ」という規範が顕在化しており、両者がそれぞれの立場でコミュニケーション成立のために努力している様子が観察された。また、NNS には正しい日本語の言語的規範に従おうとする規範意識が強く意識されており、NNS のミクロ的留意に大きく影響している。

自己事前・事中調整への変化となって表面化していた。

第 8 章 規範の動態性

本章では 2 つのタイプに動態性を分類し、分析を行った。

まず、動態性タイプ 1 は規範の適用のされ方に関するものである。適用の変化の原因としては、「慣れ」「逸脱の繰り返しや逸脱の持続」「問題発生」「新情報」「規範間や、規範と期待の相互作用」「感情の変化」「カテゴリー化の変化」といった要因の存在が確認された。例えば、「慣れ」の要因によって、NS の「NNS の理解を補助せよ」という規範は強い適用から弱い適用へと変容していった。

動態性タイプ 2 とは、新規規範生成、規範の習得、相手言語規範や他言語規範の受容や借用といった動態性を含むものである。例えば、会話の当初は規範からの逸脱と見なされていた相手のコミュニケーション行動が、次第に相手言語規範として当該接触場面の基底規範の一つとして受容されていくような場合や、コミュニケーションの成立や良好な対人関係成立のために、新たな接触場面規範が生成されていくような場合である。

また、規範の動態性は管理プロセスの結果としての動態性と、そもそもの基底規範生成に関わるプロセスの結果としての動態性といった分類も可能である。例えば、前者に関して、前述の逸脱とされていた相手言語規範が次第に基底規範の一つとして受容されていく過程は、否定的評価に留まっていた管理プロセスが、やがて相手言語規範の受容といった形で調整が行われたものと言える。一方、後者については次のような例が挙げられる。会話相手が年上であることが判明し、丁寧さの規範を顕在化させるような場合、逸脱から始まる管理プロセスの結果により規範が変容したのではなく、単に新情報が与えられ、潜在化していた規範が顕在化したものと解釈できる。

いずれにしても規範は動態的性格を強く持っており、日本語教育の観点から見ると、静態的なものとして接触場面の規範を教え込むことは必ずしも適切でないと感じられる。

第 9 章 様々な接触場面の特徴と規範：今後の展開に向けて

本章では、これまでに挙げられなかった接触場面の規範と期待について論じられた。また、これらは今後の規範研究の課題とも言える。

まず、自分と相手に対して行うカテゴリー化は規範の選択に影響を及ぼす。つまり、両者が行ったカテゴリー化に差があると、それぞれのカテゴリー化に付随する規範の相違を導くこととなり、その結果、規範からの逸脱が生じる場合がある。例えば、「先輩・後輩」

というカテゴリー化を NS がしていても、NNS が自国の社会文化的規範に従い、「先輩・後輩」の要因をコミュニケーション行動に取り入れていなければ、先輩に対する身体的行動などの規範は顕在化せず、NS に否定的評価が生じる可能性がある。

次に、期待が規範の適用や、規範の生成に影響を及ぼすことが確認された。例えば、NS が NNS の言語的逸脱にほとんど留意しないのは、「留学生の日本語は完全ではないだろう」という期待を持っており、そのため言語的規範の適用が緩和されていると考えられる。また、「外国人は目を見て話す」という期待を持っている NS が、接触場面では相手に失礼にならないように「目を見て話さなければならない」という新規規範を生成させているケースもあった。さらに、期待からの逸脱があっても、期待に沿うように調整行動が行われるわけではなく、期待自体が変容するのが普通である。

最後に、参加者は背景的知識の差や、性格上の問題、距離感の縮まり方の遅さなどにマクロ的な問題を感じていた。接触場面が日常的である NNS にとって、日本人とのネットワーク作りは日本で生活する上で大きな規範となっており、距離感の縮まり方の遅さについてはより強い否定的評価を持つと言える。さらに、NNS は NS よりもコミュニケーションの達成度に否定的な評価を感じていることも指摘できる。

第 10 章 結論

まず、対象となった接触場面の目標となる 2 つの上位規範「コミュニケーションを成立させなければならない」「良好な対人関係を形成・維持しなければならない」に関連する下位規範の整理を行った。直下の下位規範のみを挙げれば、前者では「言語ホストとして会話管理をせよ」「言語ゲストとして会話管理をせよ」があり、後者には「連带的距離を縮小せよ」「連带的距離を保持せよ」「地位的距離を保持せよ」「尊重を示せ」が存在する。

次に、接触場面における規範のミクロな視点での特殊性と、よりマクロな視点での特殊性のまとめを行った。前者のミクロな視点での特殊性とは、これまでに観察されてきた個々の社会文化的・社会言語的・言語的規範などの特殊性を指している。マクロ的な視点での特殊性とは、個々の規範を生成していくプロセスや、逸脱を規範に沿うようにする管理プロセス、または規範自体を変容させていく管理プロセスといったプロセス全体や動態性の特殊性を指している。

例えば、ある NS は、接触場面においては NNS の「目を見て話さなければならない」とする特徴的な接触場面規範を持っていた。その規範の生成にあたっては、まず、参加者が

NNS であるというインプットがされると同時に、「外国人は目を見て話す」という期待が顕在化し、さらに場所ゲストである NNS に尊重を示そうとした結果の規範生成であったと言える。他に、NS は会話相手が NNS であるということから、言語的規範の適用を緩和しているので、誤用があっても管理プロセスが留意段階に留まる傾向がある。しかし、接触場面では規範は緩和されるばかりではなく、政治的・宗教的話題のように反対に管理プロセスをより活性化させるものもある。また、知識としての社会文化的規範（期待）は、管理プロセスを活性化させ、内的場面よりも再構築される頻度が高いと思われ、このような管理プロセスのあり方も接触場面の特徴と言える。

こういった特殊性の存在は、接触場面が内的場面に向かう中間的な場面として位置付けられるべきものではなく、より独自性を持った接触場面における文化を持つものであると結論付けられている。この接触場面文化とは、先に挙げたような参加者が持つそれぞれの規範に基づいた基本的前提・価値基準・姿勢・振る舞い方・言語行動・認知の仕方などにおけるある種の傾向、及び接触場面の動態性を保証する規範管理・生成のあり方それ自体を含むものとされている。

次に、これまでの本研究の分析から明らかになった接触場面の管理プロセス・規範の動態性・特殊性と日本語教育との関連性について以下の 4 点が結論とされている。

① 接触場面における独自性が日本語教育に反映されなければならない。

これまでに見てきた接触場面の独自性は、内的場面規範を日本語教育の目標としても、NS は実際にそのように行動しないことも多く、NNS は教育された規範を現実には体験することができない場合や、また、かえって接触場面で問題を引き起こしてしまう可能性もあることが指摘できる。しかし、接触場面の規範が全く内的場面の規範と峻別されると考えるのではなく、両場面は連続体として捉えられるべきであろう。

② 接触場面を重視した日本語教育は、NS に対する異文化教育と分離不可分と考えなければならない。

日本語教育が内的場面のみに規範性を求めると、エキスパートである NS と NNS 間に権力差が生じやすい。しかし、接触場面の独自性を認め、NS と NNS が共に構築していく場面であると考えれば、同じ場面の参加者として NS 側に対する異文化教育も充実させなければ、十分な教育体制とは言えなくなる。したがって、日本語教育と異文化教育は接触場面教育内の両輪として位置付けられよう。

③ 接触場面で適用される規範は動態的性格を持つので、日本語教育はその動態性を考慮したものではない。

接触場面で適用されている規範は、これまでに考察されたように動態性を持つものであった。こういった動態的性格は教育的観点から考えると、規範を静態的知識として教授することが困難であると感じさせる。したがって、学習者に対しては問題が起きた際、あるいは起きると予測される際に、自ら調整を行っていける自己調整能力の養成が必要になる。自己調整能力には既存の規範を修正したり、新たに規範を生成できる能力や、異文化の相手に対する感受性なども含まれる。

④ 自己調整能力の育成のためには、管理プロセスを活性化させた接触場면을教育の中に取り込んでいく必要がある。

動態的な接触場面に対処していくためには、実際の接触場면을授業に取り込むと同時に、その中で問題解決の過程である管理プロセスを活性化させ、積極的に規範の再編成・再構築を行わせる訓練が必要であろう。ただし、管理プロセスは実際の接触場面では中途終了したり、留意されないことも多いので、教師によるメタ管理プロセスが必要になってくる。これは接触場面の authenticity を失わせることにもなるが、現実の接触場面では、相手が持っている問題に気付かなかつたり、留意しても忘れてしまう問題なども多く、管理プロセスに対する敏感さや気付きを促進させる必要がある。

最後に、教師のメタ管理プロセスについて一つの試案を提示した。しかし、より具体的に洗練された授業方法の作成は今後の課題である。ここでは教師のメタ管理プロセスのストラテジーとして、接触場面会話以前の他者事前調整、会話後の他者事後調整のあり方、また、他者事後調整を有効に機能させるフォローアップ・インタビューの教育ツールとしての利用法などについて触れた。

本研究はこれまであまり研究されてこなかった接触場面における規範について分析を行った。その結果、様々な規範の特徴が明らかになったと言える。しかし、接触場面が NS と NNS が対等の立場として存在する場であるなら、研究方法として日本語母語話者である筆者のみの分析には問題があるとも感じられる。また、国による違い、男女差、個人差、さらには日本語教育への具体的応用など今後に残された課題は多い。接触場面規範の動態性は、国際社会のあり方、日本社会からの要請、研究者の捉え方というよりマクロな観点からも大きな影響を受けるものである。規範自体をどのように日本語教育で捉えてい

くかという根本的な問いも含めて、今後より重要な研究分野として検討していく必要があるだろう。

参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness : Some Universals in Language Usage (Studies in Interactional Sociolinguistics)*. Cambridge University Press.
- Jernudd, B. H. & Neustupný, J. V. (1987) Language planning as a focus for language correction. *Proceedings of the International Symposium on Language Planning*, 69- 84.
- 加藤好崇 (2006) 「接触場面における規範の考察」『高見澤孟先生古希記念論文集』(pp. 48- 58) 高見澤孟先生古希記念論集編集委員会
- ネストプニー, J. V. (1974) 「世界の敬語- 敬語は日本語だけのものではない- 」林四郎・南不二男 共編 『世界の敬語 8』(pp. 8- 40) 明治書院